様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６６５１

研究課題名（和文）1930年代フランスにおける抽象表現と自然観の相関関係についての研究

研究課題名（英文）Observations on the Relationship between the Abstract Expression in the Arts and the Perception of the Natural World in 1930s France

研究代表者
山本　友紀（YAMAMOTO, YUKI）

日本女子大学・人間社会学部・研究員

研究者番号：３０５３７８８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：1930年代フランスにおいて科学技術の発展によって獲得された自然に対する新しいイメージが人間の視覚や思考に与えた影響と抽象芸術の展開との結びつきについて解明した。特に「ピュリスム」の運動にかかわったアメデ・オザンファン、フェルナン・レジェ、ル・コルビュジエ、シャルロット・ペリアンが1930年代に有機的なフォルムを用いた作品に移行していく過程と自然に対する眼差しの影響関係を個々の事例を通じて明らかにした。また、そうした制作活動の転換と当時の社会状況との深い関連性を「リアリスム」の概念の解釈を通じて検討し、自然における様々な発見が抽象表現に結び付く可能性を秘めていたことを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ひとつは、1930年代というまだ研究が未整備な時代を特徴づける思想的原理に着目した点に学術的な意義が認められる。また、1930年代の新しい自然観の展開を、20世紀初頭以来の科学と芸術を結び付けようとするダイナミックな視点と思考法との関連性に着目している点に特色がある。さらに、ピュリスムなどフランスの芸術家たちが形成した自然観から抽象芸術を捉え直すことで、当時フランス美術にとって外的なものとみなされた抽象芸術がフランスにおいて受容されるまでの変遷過程を解明するための新しい視点をもたらしたといえる。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research is to elucidate the manner in which the evolution of abstract expression in the arts was influenced by fresh insights into the natural world afforded by the progress of the science and technology in France during the 1930s. By focusing on several concrete examples, we clarify the strong influence of the naturalistic point of view on the artistic process of Purist artists such as Le Corbusier, Amedee Ozenfant and Fernand Leger, known for their abundant use of organic forms derived from nature.
Moreover, we examine how, under the guise of a new “realism”, their creative activity reflected the greater social environment of that decade, when numerous artists sought to translate scientific discoveries about the natural world into abstract artistic expression.

研究分野：美術史

キーワード：近現代美術　自然観　抽象芸術

１．研究開始当初の背景

両大戦に挟まれた 20 年間は、写真や映画というメディアが芸術に最も大きな変革をもたらした時期である。そのなかでも、生物学や天文学といった自然科学の分野における科学機器の技術的な発展に可能性を感じ、それを頼りに新たな造形的方向を打ち出す動きは、ドイツのバウハウスの芸術家たちの活動で顕著に示された。フランスでは、1930 年代にジャン・パンルヴェが海の生物を中心に科学映画を発表して以降、自然に対する新たな関心が芸術と本格的に結びつきをみせ、彼の映像作品はシュルレアリスムからも注目された。複雑な様相を呈した 1930 年代フランスの芸術を「ビオモルフィスム」という統一的な視点からとらえた先行研究があるが、個々の作家の作品解釈が中心であるため、それらの造形的傾向の共通基盤となった思想的原理についてまで考察が及んでいない。本研究は、この時代の抽象芸術の造形理念を 20 世紀初頭以降の急速な科学技術の発達と結びついた特殊な自然観から描き出すことを目指している。そのためには、その時代前後にまで視野を広げた科学技術の進展および当時の社会・文化的状況といった多角的な面から検証を行わなければならず、一次資料の収集から着手する必要がある。

２．研究の目的

1930 年代のフランスにおいて科学技術の発展によって獲得された自然に対する新しいイメージが人間の視覚や思考に与えた影響と抽象芸術の展開との結びつきについて、書誌と図像に関する資料収集を出発点として、当時の文化・社会的状況との相関関係を視野に収めながら、実証的に解明することが目的である。

３．研究の方法

本研究では、シュルレアリスムとは異なる抽象芸術を展開した「アブストラクシオン・クレアシオン」グループに加え、自然界のモチーフを作品に導入していながら十分な研究の及んでいないピュリスムの活動を主な対象として、次の 3 点について調査した。

(1) 1930 年代フランス芸術界における自然科学に関する知識・思想の受容の実態を明らかにしつつ、同時期の科学技術の発達に伴い、自然観がどのように変容したかを検証し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての自然観との連続性と差異を明らかにした。キュビスムの芸術観の基盤となったベルクソンの思想はスペンサーの社会進化論に影響を受けたものであることは先行研究でも指摘されており、1930 年代の自然観の形成の過程をみるためには、19 世紀末の進化論的な思想まで遡る必要がある。また、ル・コルビュジエとアメデ・オザンファンによるピュリスムが示した機械の美学も進化論をモデルとしていたことにも示されるように、20 世紀初頭の前衛的な動きに「自然」の世界に新しい調和的な特質を見出そうとする姿勢がすでに内包されていたと考えられる。この点を明らかにするために、本研究では機械美学が特殊な自然観へと接ぎ木されていく過程を考察した。

(2) 1930 年代の抽象芸術における自然観は、外界としての自然愛好、自然描写ではなく、生成原理のロゴスとしての自然のとらえ方が介入していた可能性を指摘できる。つまり、不可視の世界の描写を通じた内面表現に宇宙創造のメカニズムを重ね合わせ、混沌とした世界を秩序づけようとする「レアリスム」への志向をもつものではなかったかということである。本研究では、そうした自然のとらえ方が顕著にみられるオザンファンの 1930 年代以降の制作活動を取り上げるとともに、1930 年代における「レアリスム」の概念について考察した。

(3) 1930 年代に抽象表現を支持した芸術家たちの活動は、芸術の社会的な役割が重視された時代状況の下、前衛芸術の社会的機能を示そうとする意図から、建築と絵画を結び付ける総合芸術の実現へと向かったという特徴をもつ。とりわけ 1937 年のパリ万博における室内装飾や壁画は、技術と芸術を架橋した統一的なヴィジョンを含意するものであり、この時代の装飾芸術観がそうした彼らの特殊な自然観からもたらされたものであるかどうかを検証する必要がある。この点については、ル・コルビュジエとレジェの 1930 年代の制作活動の中で生み出された彼らのモニュメンタルな作品に着目した。

４．研究成果

本研究における研究成果は、主に以下の 5 点にまとめられる。

（1）オザンファンの 1930 年代の制作活動における有機的芸術観

オザンファンの 1930 年代の有機的な芸術観と生命のサイクルを描いた『生命』を中心とする一連の作品との相関関係を跡付けた。オザンファンが 1920 年代以降にル・コルビュジエと創立した「ピュリスム」の思想から方向転換し、人間の起源を探求しながら人間を主題とした絵画制作がギリシャへの旅行、当時の芸術雑誌にも取り上げられた旧石器時代の洞窟壁画に影響を受けていることを考察した。この研究成果は今後論文にまとめる予定である。

（2）レジェにおける自然の表象と装飾芸術

機械美術に魅せられた画家として、もっぱらパリでの都市生活と関連づけて記述されてきたレジェの制作を故郷であるノルマンディーという土地との関係の中で解釈した。レジェ

の 1920 年代初期の作品における田園的な光景と都会的要素が混在した生活環境が、パリ近郊のフォントネー=オ=ローズでの実体験に基づいたものでると同時に、牛や牛を世話する農夫の描写がノルマンディーで家畜飼育業を営んでいた父親の思い出と重なり合っていることを示した。また、1930 年代、リゾールの農家で過ごす中で拾い集めた数々のオブジェの形態上の探究が風景画に新しい展開をもたらすとともに、抽象表現を用いた装飾芸術作品にも作用したことを示した。この研究成果は共著の形で出版された。

（3）フランスとアメリカにおける「レアリスム」の解釈
アメリカで活躍したプレシジオニズムと呼ばれた芸術家たちの言説や作品を読み解きながら、フランスを発祥地とするキュビスムがアメリカという環境においてどのように解釈され、アメリカにおける芸術の発展にいかに寄与したのかについて考察し、国際シンポジウム「20 世紀視覚芸術・文学における前衛的レアリスム（1914－68 年）」において英語で発表した。プレシジオニストのスタイルの進展は、第一次世界大戦の混沌と破壊的状況の後に起こった、古典的傾向、機械時代の「秩序への回帰」の動向という国際的な文脈の中に位置づけられるが、本発表では、プレシジオニストのスタイルとコンセプトの基礎となるその機械時代の美学と語彙の重要性を検討し、アメリカ独自の伝統と機械時代との間の親縁性を考察した。また、プレシジオニストたちが、写真の仲立ちによって抽象的な構図の原則をキュビスム由来の図像の形式を用いて再構成する過程を分析し、アメリカにおけるキュビスムの造形の理解がアメリカ特有の客観的なものの見方に引き付けたものであり、そこに抽象芸術の原則とアメリカに伝統的なレアリスムの概念との間の融合をみることができることを指摘した。

（4）モダニズム芸術と写真の象徴的イメージ
フランスにおける写真とモダニズム芸術の内的関係を示す一事例として、写真と機械の美学とむすびつきを考察した。ル・コルビュジエ、オザンファン、ペリアン、レジェそれぞれの制作活動に共通する点として、見えない生命の力という概念に形を与えるために、自然科学と芸術を創造という同じ原則に従うものとして捉え、カメラのような機械を自然や生へと到達するための装置とみなしていたことを指摘した。こうした写真の経験に支えられた近代の知覚や認識の変革は、1930 年代という芸術の「社会性」が求められた時代において、特異な自然観に導いたことを指摘した。この研究成果は論文として発表した。

（5）1930 年代における壁画の復興
また、この研究で着目した 1937 年のパリ国際博覧会を調査するうちに、この時代の壁画には 1930 年代特有の社会的な情勢を反映した意味をもたらされていることが確認された。ファシズム政権の台頭に伴う緊迫した国際的状況を背景に、人道的な中世のイメージに依拠したフランスの壁画は、ファシストの暴動への反抗を象徴する文化的闘争の手段とみなされ、それは美術における「フランス性」を求めるナショナリスティックな動きとも結びついていたことが明らかとなった。この論考は学会で発表するとともに、学術論文にもまとめた。

（6）1937 年パリ万博における壁画作品とその意味付け
パリ万博での壁画作品に関して、恒久の建築物として建設されたシャイヨー宮における壁画と、人民戦線政府が主導的な立場で設置したパヴィリオン「パレ・ド・ラ・デクヴェルト」との壁画がそれぞれ担っていた意味づけを明らかにした。そのうえで、パリ博覧会が芸術の「フランス性」を示そうとする国家的戦略とモダニズム芸術を擁護する人民戦線の文化政策という二つの文脈が重なり合ったところに成立していること、さらに、博覧会が美術的な面において強力な統一的イメージを打ち出されなかったその背景には、第一次大戦時から継続していた政治と美術をめぐる複数の流れが複雑に交差していたことを指摘することができた。この論考は学会で発表するとともに、学術論文にもまとめた。

これらの研究では、レジェ、コルビュジエ、オザンファンが 1920 年代前後に標榜していた「ピュリスム」から特殊な自然観を展開し、幾何学的な表現を離れ、ビオモルフィックな形態を用いた表現へと移行していく過程には、1930 年代の様々な危機に直面した 1930 年代の文化・社会的状況も深く関与していることが明らかとなった。さらに、三者が自然を参照にしながら有機的な秩序を打ち立てる努力のうちにはギリシャでの体験が大きく作用しており、古代ギリシャに現代的な意味を見出していたことも明らかとなった。

５．主な発表
論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①山本友紀「装飾芸術の公共性―1937 年パリ万博の壁画作品を中心に」日仏美術学会『日仏美術学会会報』第 36 号、2017 年、23－38 頁.

②山本友紀「機械美学と写真――1930 年代フランスにおける芸術と社会」あいだ哲学会『あいだ／生成』第 7 号、2017 年、15－26 頁.

③山本友紀 「1930 年代フランスにおける壁画の特質と時代的意義――モダニズム芸術の社会性」意匠学会『デザイン理論』第 68 号、2016 年、49－62 頁.

〔学会発表〕（計 3 件）
①山本友紀「抽象とリアリズムの間で―大戦間期におけるキュビスムの二重の解釈」国際シンポジウム「20 世紀視覚芸術・文学における前衛的レアリスム（1914－68 年）」2018 年 9 月 28 日、於名古屋大学

②山本友紀「装飾芸術の公共性–1937 年パリ万博の壁画作品を中心に」第 140 回日仏美術学会例会、2016 年 7 月 2 日、於京都大学

③山本友紀「1930 年代フランスにおける壁画の特質と時代的意義–モダニズム芸術の社会性」第 222 回意匠学会研究例会、 2015 年 9 月 12 日、 於同志社大学

〔図書〕（計 1 件）
山本友紀「レジェとノルマンディー―故郷の残影」『〈場所〉で読み解くフランス近代美術』共著、三元社、2016 年、231－268 頁.

〔産業財産権〕
該当しない

〔その他〕
ホームページ等
該当しない

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。